

第六話 江戸時代の埋蔵文化

鈴木公雄

考古学は、非常に間尺の広い学問です。私の専門を申しあげますと、上水も下水も何ら関係のないまったく古い石器時代のことをやっています。数千年以前のことをやっているわけですが、最近、これは世界的な傾向ですが、実は新しい時代になった考古学的に扱える資料を研究していく分野が、ここ数十年の間に世界的に発達してき、それらを日本でいうと江戸時代ですが世界的にいうと近世、産業革命時代の、考古学がやられるようになってまいりました。

イギリスなどでも中世の町並みを掘ったり、ロンドンの市街は常々道路工事やビル工事があるたびに掘られています。ご存じのとおりロンドンには、ローマがつくった町ですから、掘っていきますとローマの初期の植民都市の状態が出てきます。中世の城壁などが出てきます。そういう研究が、歴史のかくれている事実といえますか、歴史は派手なことは記録に載りますが、地道なこと、日常ごくありふれたことの記録は

ないわけですので、そういう事柄についての校勘的な遺跡、遺溝が発見されてくるものですから、そういう形で新しい時代の考古学の調査というものが、むしろ歴史を研究する方から注目されているいろいろな問題を提示してきているわけです。

たとえば、イギリスを中心にかけているわれわれの分野の一つで、産業考古学という不思議な名前の学問があります。これは、インダストリアル・アーケオロジイという名前をつけていますが、これは産業革命当時の記念物、イギリスで最初にできた鉄橋、紡績工場の跡、ダム、そういった今でも形として残っているものもあるわけですが、廃墟になっているものもあります、そういうものを調べていく産業考古学というものがイギリスを中心にかけてまいりました。日本でも最近、早稲田大学を中心にして近世経済史の方々を中心に会員になられて発足しています。

アメリカにいきますと、これはコロンビアル・アーケオロ

ジーという名前がついていますが、メイフラワー号以来、ヨーロッパの移民たちがアメリカに本拠を構えていくのです。その最初につくった村がボストンの南のプリマスという所にあるわけですけれど、そこを発掘して初期の移民の丸太小屋の跡であるとか、そこでゴミ穴を掘って焼き物のかけらとか、当時食べた食物のゴミを捨てた跡などを掘って、当時の開拓村の復元をするというようなことが起こってきています。プリマスに行きますと観光名所になっており、プリマス・ファンデーションという基金までできています。初期の移民の村ということで、アメリカ人にとっては大変な心の故郷になるわけで非常に有名になっています。

最近では、そういうものではアメリカは飽き足らなくなり、十八世紀の中頃からしきりと西部で続発した金鉱ですが、金鉱が出るとワットと人が集まって一挙に町ができてきたり村ができてきたりするわけですが、金鉱が出なくなると寂れてしまう、そういう形のゴーストタウンが西部にはいっぱいあります。私もその一つをみてきましたが、かつては股賑を極めたと思われる町と作業場、そういったようなものがそのまま残っているわけです。アメリカの大学の考古学の教授などがそこを掘りまして、一八六〇年代ぐらい、日本でいえば鹿鳴館から日露戦争ぐらいまでに当たる時期ですがその時期のゴーストタウンを掘り、昔の住居なり作業場を復元して考古学的な研究

をしています。そういう動きも盛んに起こってきているわけでございます。

私どもが本音を申し上げますと、あまりそういうところはやりたくないわけです。われわれは、やはり古いところの考古学本来のやり方でやれる時代と地域をやりたいわけですが、欧米も日本もこれは同じですが、どうしても都市の再開発ということがこしばらく非常に重要な行政目標になってきているという経緯がございます。日本などでも東京都の中の遺跡を掘っていくと、どうしても江戸の町並みあるいは江戸時代の遺構というのが出てまいります。それを調査するのが、ここ二十年ぐらいの間に非常に急速に進みました。私（慶応大文学部）がおります港区は、江戸の南側に当たるわけで、おそらく徳川家康が江戸に入府いたしました真先に拠点を構えていった地域に当たる、増上寺もありますし皇居も近いわけですから、そういう意味で初期の江戸が発展していく一つの拠点であった場所でございます。そういう関係で、いろいろな遺跡がある。

一昔前ですと、そういうものは考古学者は目をつぶって、できるだけ早くビルを建ててしまえということになるので、ご存じのとおり日本ではいろいろな文化財がいろいろな地域から発見されてまいり、それが毎日、新聞を賑わすという状況になっております。日本の国民というのは、非常に歴

史遺産というものに対して興味がありますので、だんだん考古学ブームのようになり、それがだんだん新しくなって古代だ、中世だ果ては近世という形で遺跡の調査が進んできているわけでございます。

最近問題になっている新橋停車場跡地などというのは、これはわれわれにとりましてはあそこにもどういふものが建つかということはまだまことに戦々恐々です。実はあそこは紀州藩の下屋敷が何かがあったわけで、明治になりあそこに新橋の駅舎をつくったがために、それ以後まったく線路の下になっておりまして、破壊を受けていないわけです。ですから、新橋の貨物駅の砂利を全部取り一皮めぐりますと累々たる江戸時代の遺跡がおそらく出てくるであろう。それも、おそらく大名屋敷ですが、そういうものが非常に良い状態で保存されて出てくるでしょう。われわれは、もしあそこが市街地再開発などで現状変更を受けるとなれば、誰がやるということとは別にしておきます。調査の手を伸ばさなければならぬ地点だと考えております。東京都も、港区もそのことは頭がいたいわけです。地価の問題があそこ焦点になっていますが、もう一ついえますと作業が決まった時点から今度はわれわれがあそこをどう扱っていくかという非常にやっかいな問題が起こります。

港区には、そういう予定地が目じろ押しで、防衛庁移転の

問題でも一つございませし、ホテルオークラの南にある林野庁跡地、あそこも遺跡があることははっきりしています。あそこは、南部藩の屋敷が江戸時代の全期間変わらずありました。八戸南部です。これは、移転していません。江戸時代は、転封その他によって屋敷替えになることがよくあります。抱え屋敷という形で、大名が別の者に貸し出す地所貸し、そういうこともやるのですが、林野庁跡地に関しては南部藩がずっと持っていた土地ですので、そこも江戸時代の大名屋敷に関する考古学的な記録が埋もれていることは確実です。これが、皆、港区の範囲内に入っているものですから、港区で考古学の発掘がありますとすぐに呼ばれて、今までに三つか四つ江戸時代の遺跡を掘りました。その掘りました遺跡の中に、いくつかの上下水道関係の遺構も含まれているわけでありませし。大雑把にいいますと、東京の現在の地面の下には、江戸という大都市がもう一つ眠っているというのが正確な言い方です。要するに、埋め立て地にしましても、江戸の頃から埋め立てをやっておりますし、いろいろと遺跡があるということとははっきりしているわけです。それをしらみ潰して調べていくとなったら、ビルも建たない、何も建たないということになって大変なことになるわけですけれど、いくつかの地点に限っては調査をして、江戸時代の町並みなり遺構を明らかにしていくということが、今後、どうしても必要になる

のではないかと思うわけです。

皆さまがご関心をお持ちのような江戸時代の給排水施設、これはかつてかなり前から散発的には発見されているわけです。たとえば、配管図がたしかあると思いますが江戸の町並みに大きな檜製の木樋を埋め込みまして上水施設をつくっていくということがございます。

これは、江戸の絵図などにも配管のプランが書かれています。それを、道路工事その他でやりますと、大きな樋が出てまいります。それは、港区に現物が一部保存されていますが、厚さにしてこのぐらいの、ものすごく丈夫な樋のトイです。所々に分水をするための取り口があって、そこからさらに分水していたと思われるわけですが、上水本管のようなものがいくつか、道路工事その他です。昭和三十年代ぐらいから発見されています。私どもの大学には、四谷の医学部の前の道路から出ました上水本管が一本ございます。そういうものは、年に何カ所かで散発的に見つかっているわけです。

江戸時代の上水施設については、私が掘った経験で申しますと、いわゆる玉川上水のような形で用水としてもってくるもの、今申しあげたような本管的なかたちで、かなり広域に配管したもの、もう一つは、そこからさらに枝分かれして分水して、町人ではなく多分、武家とか特定の家だと思うので

すが、そういうところに分水している。そして、それが屋敷内に引き込まれてきた、取水施設というのでしょうか、末端の組織、そういう施設が一部あります。

もう一つ上水施設としましては、大名屋敷などでは井戸をいっぱい掘っておりますので、その井戸からの給水システム。これは、かなり大きな井戸を掘り、井戸をいくつかつなげるような孟宗竹管による地下配管を行っています。これは、かなり進んだ施設であったと思われるのでありますが、これはおそらく寺なり大きな大名屋敷の中で完結しているシステムであろうと私どもはみているわけです。そういう施設がございます。

上水施設については、そんなものがわれわれ掘って想像するわけですが、下水となりますと今度はちょっとなかなか分りにくい。いくつか正体不明な溝というのは掘っております。ヘドロのようなものがいっぱい溜まって、今日でもかなりそれを掘りますと臭いがする、真っ黒なヘドロが構底に溜まっていて、その中から壊れた遺物がいろいろ出てくるといふようなものがございます。これは、底板と側板をもっているものと、いわゆる木樋状になっているものと、乱杭の杭だけ打って流路を確保しただけのもの、本当に素掘りのドブみたいなもの。もうちょっと、これは上水施設か排水施設かよく分からないのですが、マチ石を置き、かなりきちんとし

た石組みを持っている、そういうものがございます。ただ、それがどこまで続いてどういうネットワークで処理されていたのかということになりますと、発掘が部分的でございますのでなかなか分からない。

この前掘りました芝神明前の浜松町の遺跡におきましても、発掘調査内では追跡できるわけですが、それが先どういうふうに伸びているかということになりますと、なかなか分からない。おそらく、垂れ流しであったろうと思うのですが、大名屋敷などでは何かしら一貫したシステムを持っていたと考えてもいいのではないか。これは、将来、新橋操車場のような大規模な大名屋敷が全面的に掘られますと、そこでの給排水システムのようなのが全体的に分かってくる可能性はあるだろうということなのですが、それが考古学的にあまり評価されないといえますか、われわれのほうとしましては分からないわけです。溝が出ているから、管が出ているから、水道管だろうぐらいのところ、考古学をやっている者にとってはあまり関心がない問題ですから、そのまま終わってしまいうわけです。

今後、江戸時代の遺跡を掘ります時には、いろいろな関係の方に見ていただくことが必要なのではないかという気がいたします。

大名屋敷は大名屋敷でいろいろなことが分かってくるわけ

です。早い話が、大名屋敷を掘りますといろいろなゴミが出るわけですが、そこから大名の贈答品だと思われるものがいっぱい出てくるわけです。江戸時代の文献記録をみますと、大名というのは非常に付け届けを盛んにやっています、その付け届けがどんなものがどんな時期に行われて、将軍家からどういふものをもらい、諸大名からどういふものをもらい、それに対してどういふ返礼をしたかという記録は、大名の台所ですの記録がございします。それによりますと、マダイであるとかハマグリとかいろいろな生鮮食品、ツルでありますとかアワビとか、今日の生鮮食品がさかんに遣り取りされています。そのマダイの骨とか、アワビの殻とか、そういうものが大名家の屋敷の一隅のゴミ穴から出てくるわけです。アワビなどはこんなに大きくて、凄まじいアワビです。これは、おそらく贈答品でもらったものを食べたのであろうと思うのですが、マダイなどでも骨から元の大きさを復元しますと、こんなに大きな立派なマダイがゴソゴソ出てくるわけです。

ですから、当時の武家の特にハレの食事といえますが、そういうものの内容は大名屋敷のゴミ穴掘りで非常によく分かります。また、大名屋敷はご存じのとおり、足軽、中間、年季奉公の類もおりますのでそういう長屋があるわけです。そこには、町人、百姓とほとんど変わらない生活をしていた者も居住していたわけで、そういう者が残したゴミ穴だと思わ

れる所を掘りますと、今度はイワシとかシジミといった、ごくわれわれが今日食べているようなものが骨として出てくるわけです。ですから、大名屋敷の食生活、人間の構成、そういうものを知るうえでも江戸時代の遺跡は非常に面白いのです。

江戸時代の食生活を復元するという点では、非常に有効であります。一例を挙げますと、大名屋敷ではハマグリがいっぱい出てくるのですが、縁起の良い食物ということで武家の婚礼などに盛んに使います。これは、江戸のかなり古いころから一つの仕来りとして確立していたことがある程度文献で分かるわけですが、そのハマグリを見てもみますと、はっきりと二つのサイズに分かれるのです。ハマグリの大きさを生物学の方法で計測してグラフを書いてみますと、はっきりしたバイモーダルグラフが書けるわけです。そうすると、ある大ききのハマグリと、それよりちょっと小ぶりのハマグリの二種類あったことが分かるわけです。それは、どうも一つは焼きハマグリにして、もう一つは扱ひ物碗にしたというのが適当な大きさであろうと思われるハマグリが、二種明確にサイズとして区別されて出てくるわけです。

ということ、どうもそういう生鮮食品の供給に関して、きちつとこのぐらいの大ききのハマグリというようなことが供給できるシステムがどうも江戸の前期には確立していたら

しいという感じがするわけです。ご存じのとおり、四代將軍綱吉が「生類憐れみの令」を出すわけでありますが、その時に同時に出しました禁令の中で、食物の中で活かして飼っているものを、いけすに入れていという表現をしています。そういう動物たちはすべからく放してやれというようなご禁制が出るわけです。

おそらく、マダイなども大名が婚礼をする、あるいはお客を招くというような時にはある大ききのマダイを数を揃えなければならなかったはずで、ハマグリにしてもそうだと思います。そうすると、それは出入りの魚屋程度のものでとも処理のつく問題ではなく、おそらく大きな魚問屋のようなものが、イケスのようなものにマダイを飼っており、どこどこへいつマダイを百匹なら百匹といった時に、同じ大きさのものがスツと出せるというぐらいのストックを持っていたのではないかと。ですから、ハマグリが二つに選別されて売られていたであろうというのも、そういう武家の大量の需要に応えるために出てきたシステムなのではないか。

ご存じのとおり、江戸の武士というのは完全な消費階級ですから、その人たちが増えて消費文化が興るに連れてそれに対する供給ということが非常に大きな問題を生んでくるわけです。おそらく江戸の経済的発展の一つは、消費人口である武士を支えるために流通システムその他が出来上がってきた

というふうにみられるわけです。そういうことは、文献の記録にあるようにでないわけです。もちろん江戸幕府は、初物を買いあさってはいけなやかと禁制を出すわけですけれど、それは流通システムを破壊することが大きな主眼だったのではないかと思うわけです。

そういうことも、大名屋敷から出てくるゴミ穴の動物依存体と私たちは呼んでいます。貝殻であるとか魚の骨であるとか、そういうものを集めて一定の分析にかけていくことによつてはじめてそういうシステムがあつたらうと、一種の品質管理ですが、そういうことがすでに十七世紀の前半くらいにやられていたらしいとか、いろいろと江戸時代の隠れた様相が分かってくるわけです。

そういうふうにして分かってくるものはいろいろあるだろうと思うわけで、そういう意味では近世の考古学はこれからいろいろ面白い問題を近世史の理解の上に素材を提供していくことになるはずであると思つていくわけです。そのためには、そういうことを専門にやる人たちが出てくる必要があります。今は、過渡期ですから私のように数千年前のものをやっている人間が片手間でやつて道をつけている段階ですが、やがては若い人が育つて専門にやつていき、これが考古学の一つのジャンルになっていくということが予想されるわけです。それと同時に、江戸時代のそういうものは、都市

の発達史、流通システム、あるいは都市機能の整備であるとか、様々な歴史的なあるいは社会学的関心の下で理解できることがいっぱいあるわけです。そういう形で、江戸時代の考古学というのが多角的にいろいろな興味をおもちの専門の方から眺めていただいでご理解をいただく、われわれ考古学がそれを発掘して素材を明らかにしていくということが一つの使命になるかと思うのです。

ただ掘っている人は掘っている人で、実際にそういうことが知りたいと思う人がいても、考古学のほうでそういうデータがあることすら分からないということがままあるわけです。そういう情報交流、情報交換ということも今後はいろいろな形でやつていかなければいけないでしょう。私がこういう席に臆面もなく出させていただいたのも、一つにはそういうことを申しあげて、こういうことが可能である、こういうことが分かりうるということをお知りいただき、何らかの機会にはそれを利用していただくことが必要なのではないかということがありましたので、今日、出席させていただきました。

江戸時代の考古学全般について話し出すとまだいろいろあるのですが、その他のもう一つの問題は墓の問題です。人間が都市生活で重要なのは、ゴミ、汚水の処理ということがありますし、もう一つ重要なのは人間自身の始末の問題、この問題は大きいわけです。どういうところに埋葬したかという

ことで、これは最近では都内に土葬することは禁じられているはずで、火葬以外は不可能です。土葬するためには、何か特別な規制があることははっきりしていますが、ごく最近に至るまで江戸時代は全般そうですが土葬ですから膨大な墓地が必要だったはずで、江戸の墓地は、最初は八丁堀のあたりやお堀ばたに作られるわけですが、それでは江戸の市街地の発展に対応できないというので、いくつか移転せられるわけです。一つは谷中に、一つは港区の今の私どもの大学の南手にある寺町のあたりに移転してきます。大火の後、区画整理を兼ねる形で段々に寺町が移されていくという経緯を辿っているわけです。遺体をどこに葬るかというところは、都市生活の中で大きな問題で、実際に江戸時代の墓地を掘り出すと数百体という人骨が非常に狭い中に密集して出てくるわけです。それをどういうふうに発掘するかということも、われわれの近世の考古学の大きな問題の一つなのですが、そういうことも江戸の都市の問題としては実際にあるわけです。

武家の墓はきちんとしています、庶民階級の墓はなかなか分からないわけです。人骨等々から江戸時代人の病歴とか、どんな病気が流行っていたかなどということも分かります。骨に病変が残る病気があります。たとえば、リュウマチとかカリエスのような病気は、骨に変異ができませんので、その変異を見ることによって生前の病歴が分かることがあります。

それによりますと、札幌医大のある人がやった研究ですが、江戸時代人の三分の一か半分は梅毒にかかっていたという研究があります。梅毒が最後に進行いたしますと、骨梅毒という形で骨に変異が出てきます。軽いのだと分かりませんが、進んだ段階ですと明らかに梅毒性の骨腫であるとか、梅毒性の骨の変異は分かるわけで、これは墓を掘り人骨が出るとそういうものが分かる。それによって、かなり高い率で梅毒が江戸時代に流行していたであろうことを推定した研究がございます。

一つの時代を多角的に調べることが、考古学の資料を使うことで分かってくるわけで、歴史というのとはできるだけ総合的な材料の中で総合的にその時代の全体像を浮き上がらせることが望ましいわけです。そういう意味でも江戸時代の考古学というのが今後、従来とは違った歴史の素材を提供するだろうということは、ほぼ間違いないということは言えると思います。

討 論

司会（稲場）ありがとうございます。では、質問なりご感想なりお願いしたいと思います。

西村 江戸の町割をお聞かせいただきたいのですが。

鈴木 江戸の町もご存じのとおり家康の関東入府以前は漁村

だったわけですが。現在の浜松町と田町の間あたりのところが、釣り船宿が残っている古川の河口地域が中世以来漁港で、そこが初期の江戸の物資の集積地として発展するらしい。ですから、そういう所は中世以来の村落があり、だんだん自然発生的にそれが発達していった、一時期は江戸の港として栄えるというような段階がある地域もあるわけです。

ところが、深川のようにある時期になって幕府が計画的に埋め立ててつくっていったという地域もあるわけで、そのへんの開発の歴史的な違いがあるわけです。そういう違いによって都市の計画というものも多少違っていたらうと思ってしまうのです。

それから、ご存じのとおり江戸の市街地の良いところは全部、武家と寺社が占領しまして、谷間のどうしようもない所に町人、庶民が押し込められるわけです。ですから、このへんでいいますと神谷町のあたり、高台は全部、武家と寺社が占領します。地下鉄の駅のあたりに我善坊という所がありますが、あそこあたりは谷が深くて湿地なんです。赤坂の溜池もそうでしたが、ああいうところに庶民が住み着くわけですから、良い所は全部、お寺さんとお武家さんがとってしまいうわけです。そして、どうしようもない所に長屋ができるのですから、非常に住居環境は悪いですし、おそらく排水も悪いと思います。ですから、そういう所でコロリが流行ると、

大量の死亡者が出、火事になると焼け出される、そういうことの連続なのではないかと思えます。

ですから、何回かにわたって疫病が起これば焼き払ってしまいますし、火事ならすぐにやっつけてしまいますし、その後、また作り直し、また作り直しというのを何回かやっているようです。江戸の市中の都市計画というものを、どこまで徳川幕府が本気で考えていたかということは、よく分からないのです。江戸の町屋とか都市計画の研究というのは、意外と遅れているのではないのでしょうか。江戸の人口推定にしても、なかなか難しい。一応、百万いたと言われているのですが、それもなかなか分かりません。ただ、江戸でよく分かっているのは、中後期なんです。特に江戸の後期、十八世紀から十九世紀にかけては、よく分かっています、十七世紀の江戸、つまり一番最初の江戸はなかなか記録も少ないです。ですから、江戸といいますが、三百年ありますので、どのへんの時期の研究をやるかというのは、難しい問題があるのです。

福田 先程の、竹管の水道。あれは、使い方としては、どのようにしたのでしょうか。

鈴木 どうも、井戸と井戸をつないでいるようなのです。最初に大きな掘り抜き井戸がありまして、そこから引いてきて、レベル差をつけて下にもう一つ井戸を掘って、そこに流している。途中に洗いの場のようなものを掘り込んでつくっている

ようなところもあるんです。ですから、どうもそういう形で井戸と井戸を結んで、あるところに溜池的に貯水槽みたいな形で、水溜めをつくる、そういうようなものがあつたのではないかという感じがいたします。ただ、調査が限られていましてから全容がつかめないのです。いくつかネットがあつて伸びているのだということだけは、分かります。

そんなものが町中、あるいはお寺さん、おそらく一つのお寺さんの中あるいは一つ、二つのお寺さんの中で完結しているものではないかという感じはするのです。そのところは、全体が分からないので、何ともいえないところです。

谷口 実は、中村さんに浜松町の発掘現場(写真参照)に連れていっていただいたのですが、大体、昔といえますか、つい最近の田舎などもそうだったのですが、台所は土間で、脇に洗い場があつて、カマドがあるという典型的な台所のスタイルがあります。そうしますと、あそこに瓶があつて、瓶が木樋の上に載っているような感じです。少し離れた所に樋状の洗い場があつて、大きな流しのようなものがあります。ですから、その近くにあつた木樋は流し場からの排水のものです。そうしますと、江戸も背割のような形で家と家の間に昔はドブがついていたような形で、排水路があつて、蓋があつたりなかったり、そこに流しのようなものがありましたので、近所の奥さんが井戸端会議をするような……(笑)

鈴木 大体、そんなところがいい線だろうと思うんです。調査した連中も、だいたいそんなふうに見ているんです。一番困りますのは、江戸が三百年続いてしまったために重なっているわけです。スライドに写っているものが全部同じ時代のものではないわけです。ですからパッと写ると、これとこれとこれがというふうになるわけですけれど、それが果たして同時なのか、それとも違った時代のものが写っているのか、それを考古学的に分けなければいけない。

そうすると、ある意味では写真になっているものから同じものだけを残して、あとは全部消さなければいけない。その作業が、実は町屋のようなものは大変なんです。穴を掘ったり、勝手なことをやりますから。それを、きちっと取り分けて、これだけが同じ時代に存在したというふうにして、考えるとどこまで持ち込むのが大変なんです。しかも、考古学的にいいますと、五十年ぐらいの幅は一緒になってしまします。それ以上細かく分けるといことは、特殊な例を出せばできますけれど、連続居住している所ではある時点ではっとある時点の生活を出せといわれるのがわれわれが一番苦手なんです。溜まってしまった結果を重ねて出すことはいくらでもできるのですが。取り去って、これが一番先にこうなった、その次にこうなったというふうに出すのは大変なことです。

ですから、復元といえますか、時代順の変遷を遺構からは



港区浜松町の発掘現場

つきり出すのは想像以上に面倒臭いことです。

石丸 汐留の地下も掘ると、埋蔵物があることははっきりしているわけですか？

鈴木 それは、少なくともあそこが江戸時代の紀州藩の屋敷であったということが絵図ではっきり分かっていますので、掘れば絶対に出ると思います。東京ガスの浜松町の本社を建てる時も、実はその問題があったのです。お浜御殿の石垣が残っています。芝離宮があって、その一部が東京ガスの建物の敷地にかかっている。東京ガスが、あそこはガス事業の発祥の地ということで本社を建て直すといつて、その前に港区が掘ったのです。

その時は、石垣でつくった溝のようなものの底を掘ったのですが、それはメチャクチャに物が出ました。溝というのは、今でも神田川などいろいろなものがありますが、ああいう感じだったのだと思います。水気のある所は、木材が残る。普通、乾燥した所ですと木材は腐ってしまいますので残らないです。岡の上の大名屋敷を掘った時には木製品はほとんど出ない。ですけれど、水気が多い所を掘りますと木材が全部残っています。下駄とか、桶、漆器、ザル、籠の類など、有機質の木材でつくったものはありとあらゆる物が出てくるわけです。これが、しまつが悪いんです。すぐに乾燥して変形したりしますから、保存も面倒くさいですし。

とにかく、ジクジクした所を掘ると、乾燥したところを掘る二倍も三倍も遺物の種類は多いわけです。ですから、新橋のあそこもそういうことがあるのではないかと思います。実際、大変だと思えます。下駄などが非常に出るんです。ゲタがまた面白くて、いろいろなタイプがあります。広島のように履物博物館があります。それは民族資料として伝承してきただけではなく江戸時代に本当に使っていた下駄ですが、それだけではなく江戸時代に本当に使っていた下駄が出てくるわけです。われわれが掘った所で、孟宗の水道管が出た庁舎の一部でも、下駄が四、五十足出ています。ポツクリのようなものがある、一高生が履いていたようなものがある、歯が植え込み式があれば、付け足し式のものもある、鼻緒のすげ方の位置なども今のものは下駄の真ん中にすげますが、昔のは左右に寄っています。右の下駄か左の下駄か分かるわけです。漆を掛けているものもあります。下駄一つとっても、そういう感じでいっぱいあるわけです。

ですから、江戸は特に文化が進んでいますから、いろいろな道具をつくっていたわけです。それだけ遺物量が多いです。キセルのガンクビも、私は数百本掘りました。ラオが残っているのまでありますから。先程お見せした大名の墓の中にも大名のキセルがありました。全部、銀つくりです。ラオがありませんで、銀の曲板つくりでしかも手彫りがあります。寿

という字がすかし彫りになっていたり、磨いたら非常にきれいな感じがします。銀の葉のさじ、簪とか、香炉とか、細々したものが出てきます。庶民になると、ランクは下がりますが、同じようなものが早桶の中から出てくるわけです。ですから、かなり文化が進んだ時代は物もちですからいろいろなものが出てくる。

稲場 さっき福田さんがおっしゃった孟宗竹の管のことですが、先生は掘り抜き井戸と掘り抜き井戸の間を結んでいるとおっしゃいました。掘り抜き井戸というところがよく分らなかったのですけれど、掘り抜き井戸と掘り抜き井戸の間を、なぜ孟宗竹で結ばなければいけないのかということ。下が掘り抜きでなく固めてあれば、どこから水をもってきて受水槽になって、竹の管で結んであるというならよく分かるのですが、なぜそんな必要があるか分からないのですか。

鈴木 そのへんがわれわれもよく分からないのです。井戸といたしましても下から湧かせるのではなく、引いてきて水溜のような感じの井戸、そういうようなものがあったのではないかと。水に少しレベルがありますから、そういう形で流しておいて、こっちのほうに溜井戸のようなものをつくってプールしておく。そういうふうな設備があったのではないかと。稲場 それだと分かるのですが、底から水が湧かなくて溜瓶のような井戸だったのでしょね。

鈴木 おそらく、二種類あったのだと思うのです。下の基盤の層が、青灰色蝕粘土なんです。それは、海成層の粘土なのですが、そこまで行っているんです。おそらく青灰色蝕粘土は、不透層のような形になっていて、そこまで掘ると回りの不透層で押さえられている水が浸透してきて、そこでもかなり水が溜まる。そういうものだったのではないかと考えます。

大体、井戸の枠はこのくらいの桶です。桶の底を抜いたようなものを伏せたような形で、三段か四段重ねるのです。最上段は飛ばされてしまっているのですが、おそらく五段ぐらいあると思うのですが、最後は海成層の中に食い込むようになっていきます。一番深いところで五メートルぐらいはあるでしょう。一番浅いところが四メートル弱でしょうか。私どもが増上寺あたりで確認しているのは、全部それです。あと、一番上の地層で井戸の施設で確認できたのは、井戸枠を井桁に組まれている。それが一例です。大抵、井桁に組んだ井戸枠はあとの時代の工事で吹っ飛んでしまっただけですけれど、大体、最上段のすぐ下ぐらいのところから井戸枠が出てきます。

坪井の井戸も若干はありますが、これは台地状の井戸が多いです。大名屋敷などで素掘りの井戸が掘られています。これは、規模が大きくなりまして、おそらく井戸枠の大きさが相当大きくて、われわれ見付まして掘ったのですけれど、

十メートルちかくいくのではないでしようか。相当な深さがありました。石を入れてみたのですが、しばらくたってからゴンと下のほうでいうんです。ですから、相当な深さの井戸です。

おそらく、沖積地になりますと地下水は低いですから四、五メートルでいい。台地だとやはり十メートル近く掘るような井戸が大名屋敷では多い。一個所じゃないです。

稲場 先生のお話の中に、便所の位置の話は出ていなかったのですが、便所の位置は分らないものですか？

鈴木 私の掘った遺跡ではないのですが、東大構内の遺跡ですが、そこでは絵図がよく残っています、長屋があった所、殿様の住居した所、殿閣のあった所と絵図で分かるのです。たまたま中間屋敷みたいな所を掘ったところで落とし瓶が出てきています。これは建物に付属しているのではなく、いわゆる廁式で、別の小屋みたいになっていたようです。ただ、大名のお屋敷の中がどうなっていたか分かりませぬけれど、多分、便所というのは長屋ふうな場合にはどこかまとめて一カ所か二カ所つくって共同利用しているようで、家の中にはなかったことだろうと思うのです。

それは、大きな瓶が出てくれば大体見当がつく。ただ、すべての場合、瓶を使っているかどうか、もっと簡便な、穴を掘って横木を二本渡して、紐につかまってやっているとか、

その程度の非常にお粗末なトイレのほうがむしろ庶民には多かったのではないかという気がします。瓶は、そんなに使っていないかもしれませぬ。

渡辺 油樽が多かった気がします。使つばに。

鈴木 常滑の素焼きのセッキといっているような赤茶けた、まさに常滑焼きのこのくらいのもの、それが多いです。大体東大の場合はその中に落とし物がまだ少し残っていて、それをもう一回ほじくり返しまして、排泄物の中の食料残渣物を調べたことがあるのですが、そういうケースもあります。ただ、明らかに便所の施設だと分かるような調査例はあまりない。

稲場 石器時代に糞石というのが出ているぐらいですから、おそらく一定の場所に排便していたのではないかと思うのです。それが化石になるぐらいですから、相当長い間使われていた。ところが、石器時代以降、たとえば奈良とか平安、平城京ぐらいになると、糞石にまだならないのかもしれないが、そういう話はあまり聞かない。たとえば、弥生時代とか古墳時代の糞石、あるいは半糞石ぐらいのものが出るとい話にはあまりないのではないかと思います、一体どうなっているのかということがお聞きしたかったのですが。

鈴木 一つ問題なのは糞石というものがどういう状況でつくられるか。貝塚などを掘りますと、たしかに糞石は出てまい

ります。ただ、糞石で非常に問題なのは、あれが人間の糞なのかどうかということなんです。非常に問題になるのは、犬の糞です。犬の糞と人間の糞というのは、形の上ではかなり似てしまうのです。実際に人間だと思っていたのを、調べてみたら犬の糞だったというケースもままあるんです。間違はなく人間だといわれるものは、外国に例があります。それは、洞窟遺跡なのです。メキシコなどで観光してまして、ある一定のところにそういうものが溜まっていくわけです。これは、間違いなく人間だというのは分かる。そういう例はあるのですが、それは乾燥している例。

もう一つは、何を食べていたかによって糞の残り方がどうも違うのではないだろうかということがある。よく残っている糞石を調べて観察してみますと、石灰質のものが非常に入っている。中には骨がそのまま入っている例があります。そうすると、石灰分が入っているということで、割と硬くなって残ったという可能性はある。それが、澱粉質だけのものだったら溶けてしまう可能性が非常に強い。石灰質がいっぱい入るといえるのは、犬ではなからうかと。犬は残飯を食べますし、当時の残飯は骨とか動物、魚の残り物ですから。骨をいっぱい食べていると、糞の中にカルシウムが占める割合が多くなる、そうすると硬くなる。これは、バリウムと同じです。ですから、ひょっとすると日本で出ている糞石といわ

れるものかかなりの部分は人間ではない可能性が非常にあります。ただ、人間か犬かを分析上分けるのは非常に難しいのです。形だけで決められない。

これは、いろいろなやり方がありまして、人間しかつかない寄生虫の卵の殻が糞の中に入っていると、人間に寄生虫がつかますと体内で産卵してそれが出てきます、その時の卵殻がありましてそれは残る、それでこれは人間に特有の寄生虫か犬にしかつかない寄生虫かということで犬か人間かを分ける。こういうやり方が一つあるのですが、これは日本に専門家がいらないのです。もう一つは、化学的な分析で反応が出ると言われているのですが、これもよく分からない。ですから、本当に人間なのかどうかは……。

稲場 ただ、犬というのはどこでもやりません。糞石は一個だけあるという状態で出てくるものですか？

鈴木 そうです。そんなに多くは出ません。日本の貝塚の場合にはココロ、ココロと出てくる。洞窟のように場所が決まっています、そこをトイレに使った場合には、多くなりますが、実際にはそんなに糞石がゴロゴロという形では出てきません。今日本で出ているのは鳥浜貝塚といまして、三方五湖の所にある貝塚ですが、そこで出ている糞石の数がおそらく日本では一番多いと思いますが、それにしたって全部でドンブリに山盛りに行けるかなという感じじゃないですか。その後の

調査で増えていると思いますが、多くても二、三杯じゃないですか。そんなに、山を成すという感じで出ているわけではないです。

稲場 そんなもののですか。鳥浜貝塚は有名ですね。では、犬の可能性がありますね。

鈴木 そのへんが面白いんですけど、なかなか人間だとはいえるための、まずそこがはっきりしない。それが、非常に面倒くさいんです。澱粉質の食物を多く摂取するようになってくると、あまり固まって残るといことは、特に日本のような湿気の多い所では期待できないのではないかと思います。瓶などに入っていればいいでしょうけれど、それもやはり溶けてしまうとします。便所というものができるのは歴史的に非常に新しい。それまでは、どこでやっていたか分からないみたいなのがあります。

稲場 決まった所でやっていたと思うのは、間違いでしょうか？

鈴木 決めた所でやっちはいるかもしれませんが、そこに根本的に残るような施設があったかどうか。やはり、われわれのほうですとか何か施設があって、その施設を掘れなければ分からないわけですから、そのへんがネックになっています。おそらく、排便行為のようなものは撤き散らすのではなく、やはり人間の行動意識の中で一定の地域を選んでやるのは当

然だと思うのです。ただ、それが遺跡として残るような状態で今日まで来ているか、そこに問題があるわけです。

ただ、それは将来、非常に金をかけて精密にやれば遺跡の中で分らないことはないです。それは、脂肪酸分析というのがありまして、いわゆる安定脂肪酸分析とわれわれは言っているのですが、脂肪酸というのは土の中で一定量残るので、これは、数千年間残りうるらしいです。そうしますと、土のサンプルをとってきて非常に微妙な分析にかけますと、いろいろな脂肪酸が出てくる。便の中には脂肪酸が入りますので、そういうものが遺跡の中で他の部分に比べて残存密度が濃いような所が出てくれば、そこに落としがあったのだというようなことは言えないことはない。

ただその場合に問題なのは、埋葬した所も同じに脂肪酸が出てきます。それが埋葬なのか糞なのかということになるわけです。そこまで行くのはなかなか難しいわけです。可能な方法だとは思いますが、実用的にどこまで有効なのかは、分からない。あの手、この手でやらなければならぬものですが、いろいろな手は伸ばすのですが、一つうまい方法が見つかるとうまい方法で分かってくると、分からないこともその分増えるのです。それで、結局、駄目なのです。

司会 長時間ありがとうございました。

(昭和六二年九月二六日、日本下水道協会会議室における)

特別講義)

著者の現職

慶応大学文学部考古学教室教授